

福岡県中部の筑後川流域に広がる筑紫平野に朝倉市は位置している。その地で1992年5月に開催された植樹祭に合わせて、地域の行政（合併前の甘木市と朝倉市）と合唱愛好家の協同により「あさくら讃歌」が誕生した。

朝倉出身の文学者、後藤明生さんがテキストを書かれ、三善晃先生が作曲された。大人の混声合唱に、横笛と三本の和太鼓、そして語りにより構成される壮大な作品である。そこでは「全編を通じ甘木・朝倉の歴史・風土・言語・習慣が描かれ、郷土愛と未来への思いが表現される。（三善晃）」

同年に再演された後も、地元の方のご努力により、ずっと歌い継がれている。

その後、大人だけでなく、子どもたちも歌いたい、という地元の声の高まりを受け、小中学校の生徒から多数の詩が集められ、三善先生がその中から7編を選び、大人の「あさくら讃歌」と共に歌うための7つの小品を作曲された。それらは「子どもとともに歌う“あさくら讃歌”」として、2010年5月に初演された。

三善先生は初演時のプログラムノートに、次のように書いておられる。

大人に謳われる大人のロマンの世界に、子どもが単に共同参加するのではなく、子どもの率直な感性で自分たちの現実を提起するという協同。子どもたちは、ナチュラルリストでありリアリストでもある。それによって、大人の世界に時空を超えた立体性を与えようと私は試みた。

こうして「婆沙羅」は夢でも幻想でもなく、現に進行中の生態として現出するのではないか。そこに、子どもたちの主体的な連帯を期待する心が生まれた。それは、対立ではなく「深さを創り出す本物の協同」だ、とその心が考えている。大人と子どもの協同を、あらためて、あさくらの地域に捧げたい。

こうして曲はその規模を拡大し、より高い次元の作品へ昇華することとなった。

以下、曲の登場順にその内容を紹介する。「大」は大人が歌う曲、「子」は子どもが歌う曲で、「子」について三善先生のお言葉を引用している。

#### 大1 プロローグ/幻の卑弥呼の国は・・・

北九州の地は、大陸からの玄関口として古来より発展してきた。卑弥呼の邪馬台国は朝倉の地にあったのではないかという学説があり、そのロマンをかき立てるように曲は始まる。

#### 子1 はじめての妹のなき声

大人の歌は「人はどこから来てどこへ行くのか」などと自問する。だが、子どもの歌は「新しい妹が『できた』」と言って素直に喜ぶ。その奥行きと対称を描きたい

#### 大2 樹の精霊

朝倉には巨大な楠木が多く存在する。また山間部では巨大な杉が神秘的な森を形成している。樹には古来より精霊が宿ると言われる。その樹霊の物語を躍動する太鼓と共に紡ぐ。

#### 子2 木とおしゃべり

子どもは、自分の体験しなかった直近の過去=戦争のことを、その体験者=木に訊ねてみたいと思う。

#### 大3 菜の花の迷宮

春になると、筑後川の両岸は菜の花の黄色に埋め尽くされる。この地に生きる人にとって筑後川の存

在、菜の花の存在は、人生そのものと言っても過言ではないのだろう。曲中には、親から子へ、子から孫へと、ずっと歌い継がれてきた《菜の花の国》が挿入され、これまで歩んできた人生に思いを馳せ、そしてこれから歩むであろう人生への迷いが、菜の花の波に揺られ続けている。

### 子3 ふるさと

人にはふるさとがあり、「仲間がいる」というところに子どもの純真を覚える。この歌全体が、率直な子どもの「ふるさと讃歌」だ。子どもの眼が新鮮に写る。

### 大4 エロスとタナトス

7世紀、唐・新羅に攻められた百済からの応援要請に応じた斉明天皇は、飛鳥から朝倉に入るが、そこで病死してしまう。同行した中大兄皇子(後の天智天皇)がその遺志を継いで朝鮮半島に攻め入るが、白村江の戦いで完敗を喫し、大宰府などに防人を配置し、大陸との戦争の緊張が高まった。朝倉は、この激しい戦乱の時代の重要な舞台であり、さまざまな愛と死のドラマがあった。それらを詠んだ天智天皇、大友旅人の和歌を軸にして曲は構成されており、そこに朝倉を舞台にした謡曲「綾の鼓」の断片が挿入され、最後に地元の詩人、宮崎湖処子の詩に美智子皇后陛下が作曲された「おもひ子」により、新しく誕生した命への限らない愛が歌われる。

### 大5 樹の精と風と鳥たちのコロス

「ゲナ」とは福岡の方言で「～だそうだ」の意。邪馬台国は甘木・朝倉にあったという説を、樹の精や風や鳥の合唱としてユーモラスに語る。そして「ゲナゲナ話は、嘘じゃげな」と肩透かしを食わせる。4/8+3/8+2/8の変拍子が実に小気味よい。

### 子4 川原

甘木・朝倉地方の言葉を勢いよくつかって、雄大な筑後川の春の風物をいきいきと歌った。生命感あふれる「つくし」の様子にすべてがくるまれて、見事な讃歌になった。大人の「ゲナゲナ」のffをさらにかき立てるように勢いよく。

### 大6 秋月の思い出

朝倉市の北部の山間に秋月城址とその城下町がある。中世以来の長い歴史を有するが、明治維新から9年後、政府に対して土族が反乱を起こす。しかしこの「秋月の乱」は、わずか一週間ほどで鎮圧されてしまい、土族たちは自刃、あるいは斬首、懲役などで処罰される。今では、朝倉を代表する観光地の一つであるが、美しく端正な城下町は独特の張りつめた空気が漂う。その過酷な歴史が土地に染み付いている故なのかも知れない。その哀愁を龍笛が鮮やかに彩る。

### 子5 夜須町の風景

原詩には、「生きいる」とある。風、光、川、山、緑が、生きているという実感に取り込まれていることは、さすが甘木朝倉の子どもだ。風土を感じさせる。

### 大7 「婆沙羅」哲学

「バサラ」とは、「豊か」「贅沢」「たっぷりある」というような意味。朝倉は自然も歴史も人々の暮らしも、精神も、すべて「バサラ」と歌われる。まさに朝倉の面目躍如である。

#### 子6 あした

原詩では、「何ん」という文字のつかい方が2ヶ所あった。ゆっくり考えようと言うあたり、これも「婆沙羅」の哲学になるのだろう。そう言われてみれば、これは生死にもかかわる命題かもしれない。ともあれ、これも「婆沙羅」人間の所産だ。

#### 大8 エピローグ／筑後川、メビウスの帯のような

悠久の時を流れ続ける雄大な筑後川。人々に多くの恵みをもたらし、まさに地域を育ててきた。後藤さんは「過去」と「現在」、「古代」と「未来」、「天」と「地」がぐるりと反転する「メビウスの輪」のような川と呼んだ。そして、川は恵みだけでなく、時に豪雨による災害をもたらすこともある。これもまた「メビウスの輪」だろう。私たちは、その永遠の大河に畏敬の念を抱きつつ、川と共に生きる喜びを壮大に歌い上げる。

#### 子7 この場所

筑後川の雄大なメビウスの帯を歌うエピローグにふさわしい郷土愛を謳いあげる。

私は1992年12月の「あさくら讃歌」の再演を現地に聴きに行き、すっかり心を奪われてしまい、すぐに自筆楽譜をお借りしてその翌年、豊中混声の第33回定演で演奏した。その時のご縁で、地元の「あさくら讃歌合唱団」代表の坂田啓明さんと、長いお付き合いが始まり、これまで幾度となく「あさくら讃歌」の演奏にご助力くださった。

次いで、私は2010年5月の「子どもとともに歌う“あさくら讃歌”」の初演も聴きに行き、いつかの曲も是非、豊中混声と豊中少年少女で歌いたいと思ったが、40分を超えるととも規模の大きい作品のため、これまで演奏に踏み切れなかった。

昨年7月、朝倉の地を襲った九州北部豪雨の際、メディアを通じて流れてくる悲惨な映像に言葉を失い、さらにようやく連絡がとれた坂田さんから、合唱団の中にも犠牲になった方がおられると聞き、いてもたってもいられなくなり、ついに「子どもとともに歌う“あさくら讃歌”」をとりあげる時が来たと思った。

幸い、地元の皆さまのご理解とご協力により、子どものための楽譜も貸していただくことができ、また初演以来、ずっと演奏を支えてこられた打楽器の高橋明邦先生のお力添えも得られた結果、本日の演奏が実現した。関係者の皆さまに心から感謝申し上げると共に、演奏を通じて、犠牲になられた方々を慰霊すると共に、ふるさとの復興に向けて力強く歩み出しておられる地域の大人と子どもの皆さんの協同に、心からのエールをお送りしたいと願う次第である。